

【第4回策定委員会】

はちのへビジョン8.0

知るほど好きに。好きが誇りに。

ここに居たいと感じる海から拓けた創造都市 八戸

第8次 八戸市総合計画 [基本構想]

<原案>

※名称や将来都市像は案です

未来、みらい、M I R A I … あなたはこのまちで、どんな未来を思い描きますか？

10年後の自分って、何をしているんだろう？

10年後。小学生の多くは成人となり、中学生や高校生は社会人に。中には子育てをしている人もいるかもしれません。職場では若手が中堅になって仕事に打ち込んでいるでしょうし、一方でその頃には定年を迎え趣味を楽しむ人もいるでしょう。

そんな私たち一人ひとりの変化は、大きな視点で見ると、まちの変化でもあります。私たちの考えや行動が変わっていくと、まちのその先も変わっていく。つまり「私たちの未来は、まちの未来」なのではないでしょうか。だから、自分の未来へのビジョンを持てば、まちの未来のビジョンも見えてくる。自分らしく楽しく暮らす毎日を思い描けば、ワクワクするようなまちになっていく。

この『はちのへビジョン8.0』は、そんな未来を考えるための羅針盤のようなもの。中に出てくるいろんなキーワードを参考にしながら、私たちみんなが未来をイメージしていきましょう。



八戸未来フォトコンテスト作品

はじめに

第 1 章
将来都市像

第 2 章
4 つの理念

第 3 章
はちのへについて .

第 4 章
本計画について . .

おわりに

将来都市像



八戸には、日々の暮らしのふとした瞬間に、まちの価値を感じられる豊かさがあります。港に水揚げされるおいしい海産物。食卓を囲むせんべい汁の温かさ。朝市に集う人々の活気。地元スポーツチームを応援する一体感。港に行き交う船や臨海部に立ち並ぶ工場群。そこで働いている人々の力強い姿。南郷に広がる里山の風景、種差海岸に広がる美しい自然。蕪島を自由に舞ううみねこ。海から吹いた肌に感じる心地よい風。

こうした日常にある風景や営みの一つひとつが、私たちに「このまちはいいな」という実感をもたらしています。

夏には八戸三社大祭の山車がまちを彩り、冬には八戸えんぶりが春を呼び込みます。受け継がれてきた伝統文化、海とともに歩んできた歴史、そしてまちの中で感じられる温かな人柄は、八戸に関わる人の心に深く響き、まちへの愛着を育んでいます。

八戸を知ることは、八戸を好きになるきっかけとなります。何気ない景色に目を向けること。地域の歴史や文化に触れること。働く人の姿や、まちを支える営みに気づくこと。そうした一つひとつの出会いが、八戸への気持ちを深めていきます。そして、その気持ちは、やがて自分たちのまちとして大切に思い、誰かに語りたくなる思いへと変わっていきます。

進学や就職で一度八戸を離れた人にとっても、帰省したときに感じる海の匂いや懐かしい味、人とのつながりは、帰ってきた安心感と、もう少しここに居たい思いを呼び起こします。

年々人口が減少していく中、今ここで暮らす人にとっても、一度離れて戻ってくる人にとっても、外から訪れる人にとっても、八戸はそれぞれの形で価値を感じるまちでありたい。

海から拓け、海とともに発展してきた八戸。その歩みの中で育まれてきた自然や食、文化の豊かさ、産業の力強い営み、人の温かさを次代へ受け継ぎながら、人々のつながりと挑戦によって新たな価値を生み出し続けていく。

私たちは、八戸を知るほど好きになり、その思いが誇りへと変わり、誰もが「ここに居たい」と感じられるまちをつくっていきます。そして、そんな「知るほど好きに。好きが誇りに。ここに居たいと感じる海から拓けた創造都市」を目指します。

将来都市像の実現に向けて八戸に関わるみんなで育てる 4つの理念

理念1：挑戦を重ね、楽しみ合う

八戸は、海と港を力に、新しい道を切り拓いてきたまちです。

新産業都市の指定を契機とした産業基盤の整備、東北新幹線八戸駅の開業による交流の広がり、中核市移行による都市機能の充実、高等教育機関との連携による人材育成など、時代の節目ごとに挑戦を重ねてきました。

挑戦は、特別な人だけのものではありません。こどもたちが地域を知り、自分の可能性を広げること。若者が進学や就職、起業、地域活動に踏み出すこと。働く人が新しい知識や技術を学び、次の仕事に挑むこと。地元企業が新しい仕事を生み出すこと。地域の文化やにぎわい、地域の活動を次へつなぐこと。その一つひとつが、八戸の未来につながる挑戦です。

私たちは、八戸が挑戦を重ねてきた歩みを受け継ぎ、こどもから大人まで、誰もが自分らしく学び、挑戦できるまちをつくります。そして、その一步を楽しみながら、挑戦をまちの力へとつなげていきます。

理念2：関わり合い、応援し合う

八戸には、まちを応援するさまざまな関わり方があります。

地元スポーツチームに声援を送り、まちに一体感を生み出す人がいる。市民活動や地域活動に関わり、自分の経験をまちづくりに活かす人がいる。高校生や若者が地域に飛び込み、事業者、学校、行政と協働する動きがある。港やものづくりの現場で培われた知恵や技術を、地域の仕事や次の世代につなげる人がいる。

応援は、スタンドからの声援だけではありません。知恵を出すことも、技術を活かすことも、経験を伝えることも、全てがまちづくりに関わる大切な応援です。八戸では、スポーツ、市民活動、若者の地域参加、産学官の連携など、さまざまな場面での人の関わりがまちの力に変わっています。

みんなが持つ知恵、経験、技術は、まちにとって大切な資源です。個性や得意なものを持ち寄れば、地域に関わるきっかけが生まれ、挑戦する人の背中を押す力になり、まちはもっと面白く動き出します。

私たちは、自分のことから関わり合いながら、応援の輪を広げ、まちの未来をみんなでつくっていきます。

将来都市像である「知るほど好きに。好きが誇りに。ここに居たいと感じる海から拓けた創造都市」を実現していくためには、市民、地域団体、事業者、行政など、多様な主体が、それぞれの立場からまちづくりに関わっていくことが大切です。そのため、本構想では、八戸に関わるみんなが共有し、大切にしたい考え方について、4つの理念を掲げます。

理念3：感動を味わい、分かち合う

八戸は、触れた人の心に残り、誰かに伝えたくなるまちです。

八戸三社大祭の熱気。八戸えんぶりの凜とした空気。朝市のにぎわい。種差海岸に広がる壮大な海と芝生の美しさ。海から拓けたまちならではの食の美味しさ。そして、縄文の記憶は、遠い昔からこの地に人が暮らし、紡いできた時間を感じさせてくれます。

味わうほど、触れるほど、八戸の魅力は少しずつ深まっていきます。こうした感動は、特別な日だけのものではありません。日々の暮らしの中でふと心が動くこと。家族や友人を連れて行きたくなること。帰省した人が「やっぱり八戸はいい」と感じる。初めて訪れた人が、また来たいと思うこと。その一つひとつが、八戸ならではの感動です。

その感動を、誰かと分かち合う。語り、勧め、ともに味わう。一つの感動が次の交流を生み、まちのにぎわいや活力につながっていきます。

私たちは、八戸ならではの感動を味わい、分かち合いながら、ここでしか出会えないまちの魅力を磨いていきます。

理念4：温もりで包み込み、尊重し合う

八戸は、人と人との距離が近く、温かな空気につつまれています。

横丁で隣り合った人と会話が生まれるように、祭りの場で何気ない言葉が交わされるように、日々の暮らしの中に、人と人のゆるやかなつながりがあります。

そうしたつながりは、楽しい時間だけではなく、不安な時にも力になります。自然災害に向き合ってきた経験の中で、日頃から声を掛け合い、困ったときには支え合う関係が地域の安心を支えてきました。地域の活動や自主防災の取組など、顔の見えるつながりは、そうした人の近さを、暮らしを守る力へとつなげています。

また、八戸で暮らす人の背景は一つではありません。生まれ育った場所、年齢、家族の形、働き方、言葉や文化、置かれている状況は、みんな異なります。だからこそ、違いを越えて、互いを尊重し合うことが大切です。

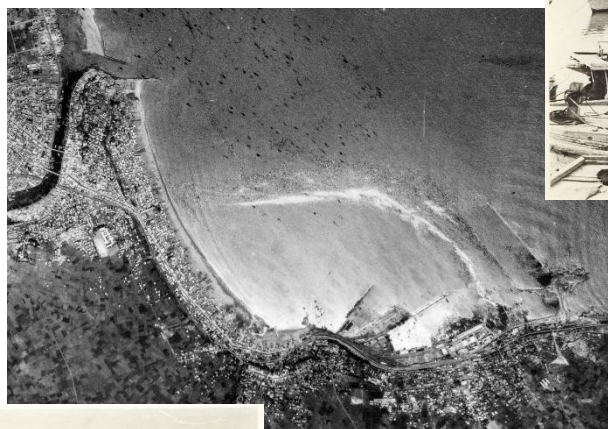
安心できる場所だから人は挑戦できます。人の温かさがあるから、ここに居たいと思えます。私たちは、まちに流れるゆるやかなつながりを大切にしながら、一人ひとりを包み込み、誰もが安心して暮らせるまちをつくっていきます。

未来を思い描く市民一人ひとりの意思が、

～まちの未来を考えるために、

八戸市は、昭和4年5月1日、当時の八戸町・小中野町・湊町及び鮫村の4町村の合併により誕生しました。

昭和23年頃 航空写真



これまで幾多の困難を先人たちのたゆみない努力によって乗り越え、恵まれた地域資源を活かして、まちの基礎を築き、全国有数の水産都市、北東北屈指の工業都市として発展してきました。



昭和10年頃 湊川



昭和28年頃 鮫港

当市が目覚ましい成長を遂げる契機となったのは、昭和39年の新産業都市指定。行政のみならず経済界や市民が一体となって大きな夢と構想を掲げ、強力な運動を展開しました。

その結果、臨海部を中心に産業基盤の整備が進み、現在は、工業をはじめ、水産業や農畜産業など多種多様な産業が集積する一大産業都市として、北東北の地域経済をけん引しています。

八戸のまちを拓いてきました。

「まちのこれまで」を振り返ってみる～



また、平成14年の東北新幹線八戸駅開業のほか、平成29年には中核市に移行し、近隣7町村と八戸圏域連携中枢都市圏を形成するなど、北東北地方の住民生活と地域経済を支える拠点として、更なる飛躍を遂げています。



いま、時代が大きく変化する中で、新しい八戸を創り上げていくためには、当時のような市民一人ひとりの力を結集するとともに、当市が持つ広域的な公共交通ネットワークの拠点としての強みや、豊かな地域資源を最大限に活かし、更なる市勢発展につなげていく必要があります。



市民のみなさんに聞いてみました！

～まちの未来を考えるために、

豊かな海が育む食文化があるまち。そして旨みたっぷりの海産物が多い。ご当地グルメの火付け役であるせんべい汁も有名になってうれしい。



色とりどりの食材が並ぶ食のテーマパーク八食センターがあるまち。八戸の食を楽しむなら外せないスポットだから、みんなにオススメしたい。



誇らしい祭りがあるまち。夏を華麗な山車が彩る祭礼行事「八戸三社大祭」、冬に春の訪れを願う民俗芸能「八戸えんぶり」は、脈々と地域に受け継がれてきた。見る側と担う側が明確に分かれず、多くの市民が準備や運営に関わり、まち全体で支える文化が受け継がれているのがとてもいいなと思う。

朝市から始まる「特別な朝」があるまち。館鼻岸壁朝市では、買物や食事を通じて人と人が自然に言葉を交わし温かな人柄が感じられるし、夜明け前から活気がみなぎっていて、行くたびにワクワクしちゃう。

『八戸市ってどんなところ？』

「まちのいいところ」を再確認してみる～

競技だけでなく応援や交流の場として親しまれている**スポーツ文化**があるまち。プロスポーツをはじめとするチームの活動を通じて、世代を超えた一体感が生まれていると思う。



種差海岸やウミネコの繁殖地として知られる**蕪島**など、海とともにある自然環境に恵まれているまち。こうした自然は眺めてキレイなのはもちろんだけど、散策や学習、日常の憩いの場として暮らしの中に溶け込んでいて、すごく贅沢だと思う。



まんまるフォルムにイカのずきん、くちばしの先には真っ赤な班。いかずきんズは「ウミネコ」の4人家族。ウミネコの鳴き声にちなんで、語尾には「にゃ」とついちゃうんだにゃ。生まれも育ちも八戸の蕪島で、八戸が大好きすぎて住み着いちゃった。そんな八戸の魅力を広めようと今日も奔走中！

※令和7年度に行ったワークショップやアンケートなどにおいて市民の皆さんから寄せられたご意見から、主なものを再構成してまとめました。

総合計画の策定にあたって

近年、地方を取り巻く環境は大きく変化しています。人口減少や少子高齢化の進行、人材不足、デジタル化や脱炭素化への対応、価値観や暮らし方の多様化など、地域社会が向き合う課題は複雑さを増しています。こうした時代において、市政を総合的かつ計画的に進めていくためには、将来を見据えたまちづくりの方向性を明らかにすることが重要です。

総合計画は、市の目指すべき将来像と、その実現に必要な政策等を定める、市政運営の最も基本となる計画です。

いわば、市の進むべき方向を示す**羅針盤**であり、八戸市が策定するさまざまな分野の個別計画を導く役割も担っています。

中でも基本構想は、八戸に関わるみんなが「将来こうなっていてほしい」と思い描くまちの姿を、将来都市像として示すものです。この将来都市像を共有しながら、市民、地域団体、事業者、行政などが、それぞれの立場でまちづくりに関わっていくことが大切です。

人口減少の時代だからこそ、このまちで暮らす一人ひとりが、自分らしく力を発揮し、日々の暮らしに幸せや満足を感じられることが大切です。

まちの豊かさは、人の数だけで決まるものではありません。

ここで暮らす人が安心して過ごし、学び、働き、楽しみ、地域とつながりながら、「八戸で暮らしていてよかった」と感じられることが、これからのまちづくりの大切な目標です。

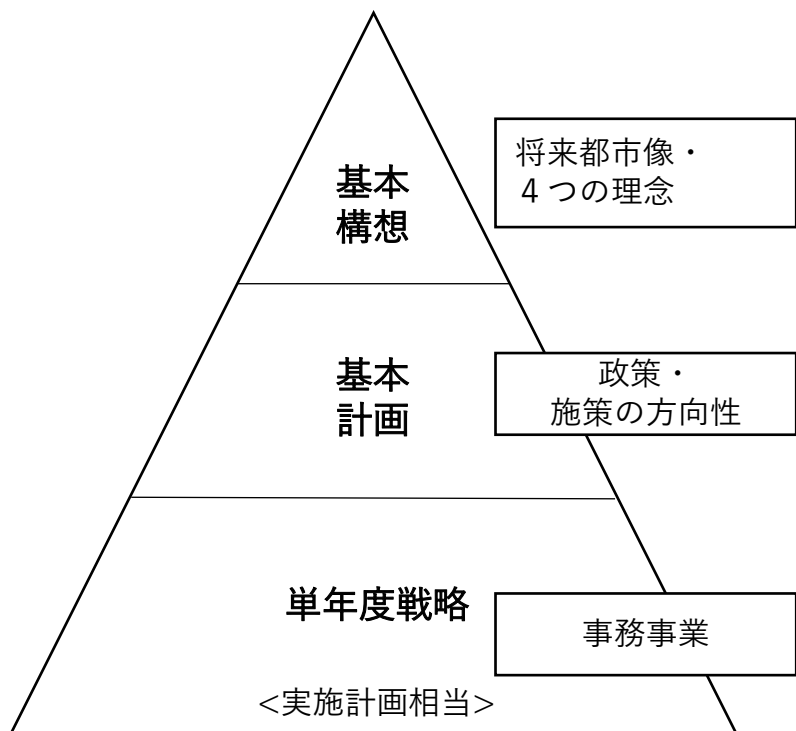
本計画の計画期間について

基本構想は、市の長期的な将来ビジョンを示すものであることから、まちづくりの大きな方向性を安定的に共有するため、計画期間を8年間とします。

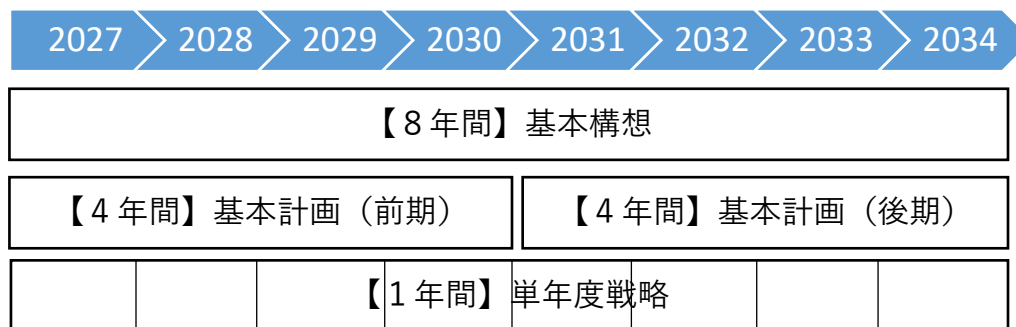
一方、基本計画は、時代の変化や市民ニーズに柔軟に対応できるよう、第7次八戸市総合計画より計画期間を短縮し、必要に応じて機動的に見直しを行います。

また、これまで総合計画を補完する計画として取り扱ってきた単年度戦略については、本計画から総合計画の一部として位置付け、基本計画と連動させながら一体的に管理・推進します。

本計画の構造



本計画の期間



10年程度先の八戸市を見据え、基本構想の期間を8年間とし、基本計画はその間を2期に分け、各4年間としています。
また、実施計画相当である単年度戦略は単年度で更新していきます。

計画の見直し

単年度戦略は毎年度の見直しを行うほか、計画期間中に社会情勢が大きく変化した場合は、基本計画の見直しを検討します。

八戸市総合計画策定委員会名簿

任期：令和7年10月9日～令和8年〇月〇日

1 アンジェリカ・ワン	八戸市多文化共生審議会 委員	16 高野 英夫	青森県畜産・飼料コンビナート振興協会 副会長
2 今川 和佳子	はちのへ文化のまちづくりアドバイザー ボード 委員	17 高橋 学	岩手県北自動車(株)南部支社 支社長
3 岡本 信也	八戸商工会議所青年部 会長	18 塚尾 沙貴	公募
4 奥寺 良之	八戸市医師会 会長	19 堤 静子	八戸市総合計画等推進市民委員会 委員長
5 小澤 直子	八戸市教育委員	20 田頭 初美	八戸市こども・子育て会議 委員
6 金入 健雄	八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議 会長 (R6～7)	21 中村 一明	連合青森三八地域協議会 議長
7 川上 敦史	高館地区連合町内会 会長	22 広瀬 知明	八戸商工会議所 副会頭
8 木村 照男	八戸農業協同組合 代表理事専務	23 町田 直子	NPO法人ACTY 理事長
9 栗林 志音	公募	24 松橋 光宜 ※1	社会福祉法人八戸市社会福祉協議会 理事 兼事務局長
10 小藤 一樹	八戸市都市計画審議会 会長	25 間山 路代 ※2	社会福祉法人八戸市社会福祉協議会 事務 局長
11 嵯峨 弘章	三八地区高等学校長協会 会長	26 南 将人	八戸工業高等専門学校 教授
12 坂本 俊也	八戸青年会議所 顧問	27 目澤 伸一	八戸市スポーツ推進委員協議会 会長
13 佐々木 伸夫	VISITはちのへ 理事長	28 山道 典子	公募
14 重 浩一郎	八戸工業高等専門学校 准教授	29 類家 徳久	商店街振興組合三日町三栄会 理事長
15 接待 健一	八戸港振興協会 常任理事		

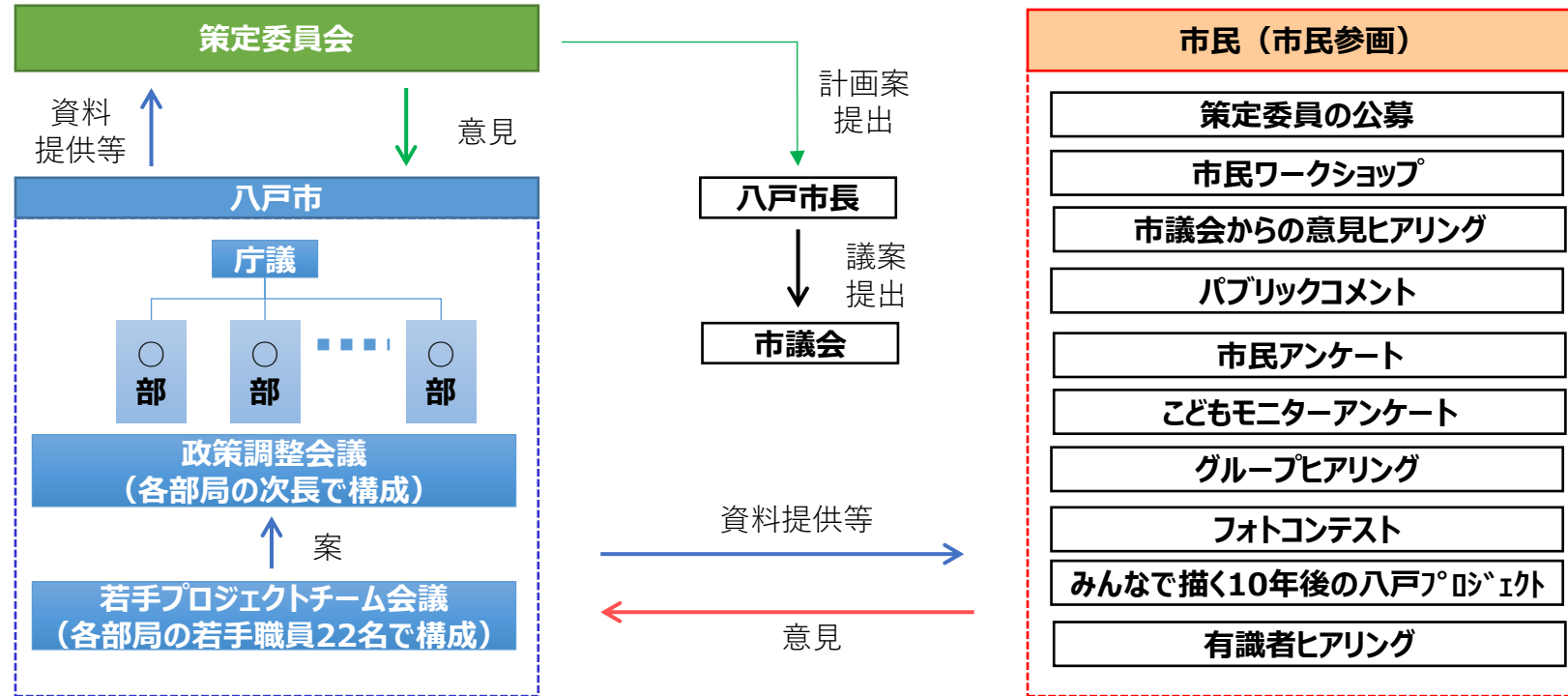
※1：任期R8.4.1～

※2：任期～R8.3.31

委員長：堤 静子

副委員長：南 将人

策定体制



基本構想に関する歩み

R7.10.9 第1回策定委員会

(策定コンセプト、計画構造・期間、市民参画内容)

R8.1.16 第2回策定委員会

(基本構想の骨子案検討)

R8.4.21 第3回策定委員会

(基本構想の素案検討)

R8.6.22 第4回策定委員会

(基本構想の素案検討)

R8.8.■ 第5回策定委員会

(基本構想の原案検討)

R8.8.■～9.■ パブリックコメント

R8.10.■ 第6回策定委員会

(基本構想の提出案確認)

R8.10.■ 市長へ提出

R8.12.■ 市議会による基本構想の議決

市民参画の取組について

ビジョンを決めていくにあたり、市民の皆さんの声を、聞きたい。
そこで、いろいろな場をつくり、たくさんのご意見をいただきました。

市民ワークショップ

- ・ 共通テーマ「10年後になっていてほしい八戸市」
- ・ R7.12.13 23人参加（社会人）／R7.12.20 54人参加（高校生20人、大学生25人、社会人9人）

市民アンケート（下記2種類とも内容は同一）

- ・ 【無作為抽出及び市政モニター】 期間：R7.11.21～12.12 配付数：3,103人／回答数：1,582人（回答率51%）
- ・ 【上記以外（誰でも回答可能）】 期間：R7.12.15～R8.1.16 回答数：134人

こどもモニターアンケート調査

- ・ 期間：R7.11.21～12.8 配付数：100人（小学校5年生～高校3年生）／回答数：82人（回答率82%）

フォトコンテスト

- ・ 実施期間：（第1回）R7.10.17～R8.2.28 （第2回）R8.4.21～R8.7.■

みんなで描く10年後の八戸プロジェクト

- ・ 実施期間：R7.12.19～R8.1.16 有効回答数771の意見（場所：八戸市役所、はっち、八食センター、八戸駅）

グループヒアリング

- ・ 多文化共生（外国人）：R8.1.25 ・ デジタル：R8.1.30 ・ 若者：R8.1.31 ・ 青年経済界：R8.2.13

有識者ヒアリング

- ・ 地方行政、産業、広域連携、行財政、スポーツ×まちづくりに関する分野の有識者からヒアリングを実施

パブリックコメント

- ・ 期間：R8.〇.〇～〇.〇 〇個の意見

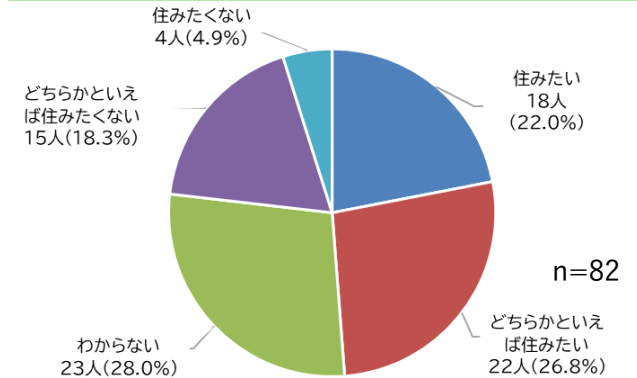
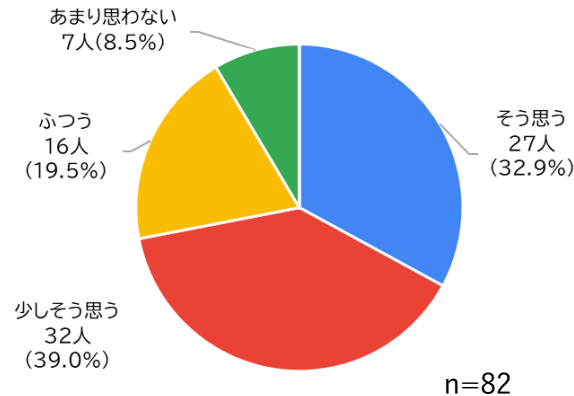
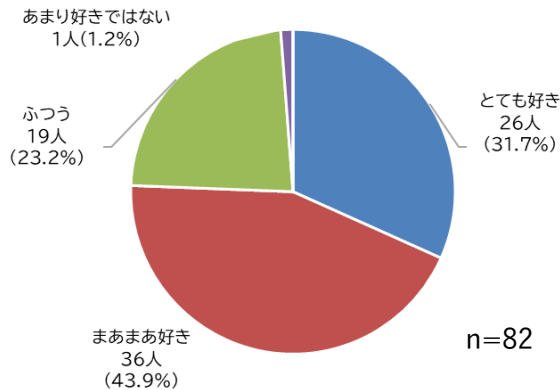
八戸市をどう思いますか？

こどもモニター

問：八戸市が好きですか？

問：住みやすいまちだと思いますか？

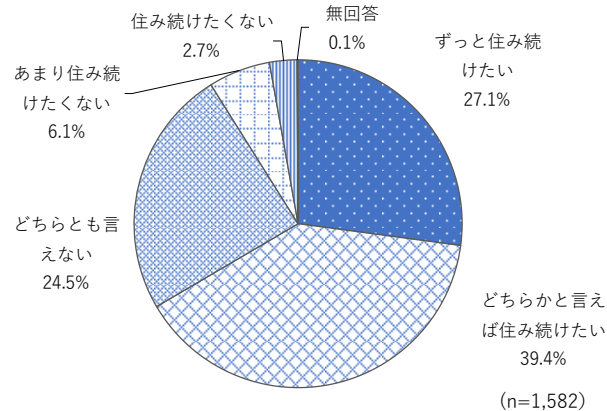
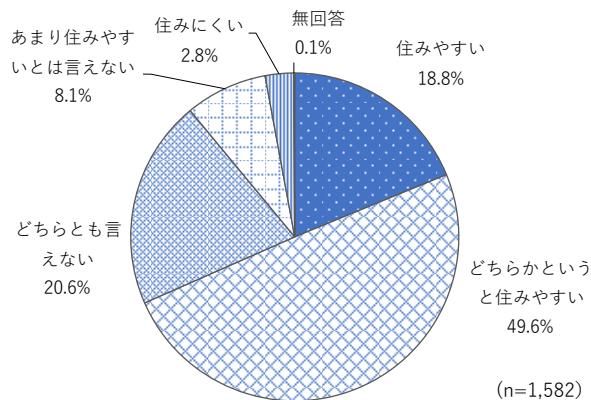
問：大人になっても住みたいですか？



市民アンケート（無作為抽出及び市政モニター分）

問：住みやすいまちだと思いますか？

問：住み続けたいですか？



アンケートから見てきたのは、八戸にはすでに「好き」と「住みやすい」の土台があるということです。

こどもたちの「八戸が好き」。市民の「八戸は住みやすい」。その実感は、八戸の未来をつくる大きな力です。

これからは、その思いをもっと深め、広げていくことが大切です。

市民の実感を出発点に、幸福感和満足度を高めるまちづくりを進めていきます。

未来を考えることから、次の100年へ

『はちのヘビジョン8.0』の基本構想をご覧になって、いかがでしたか？

未来を考えること。

まちの未来は、誰かだけが作るものではありません。一人ひとりが自分の暮らしや大切にしたいことを見つめ、考え、動き出す「自分ごと化」から始まります。その小さな一歩が新しい挑戦となり、誰かを応援する力となり、まちの中にわくわくが連鎖していきます。

八戸を知るほど、好きになる。そして、知れば知るほど、その「好き」の解像度は上がっていきます。ただ「なんとなく好き」だったまちが、朝市の活気、海から吹く風、祭りの熱、働く人の姿、人の温かさなど、一つひとつの理由を持った「好き」へと変わっていく。その積み重ねが、誰かに語りたくなる誇りになっていきます。

本ビジョンの計画期間中に、八戸市は市制施行100周年という大きな節目を迎えます。100周年は、先人たちが築いてきた八戸の歩みを振り返る機会であるとともに、次の100年に向けて、私たちがどのようなまちをつくっていくのかを考える大切な節目です。だからこそ、まずは今住んでいるこのまちを知ってみる一歩から始めてみませんか？

「知るほど好きに。好きが誇りに。ここに居たいと感じる海から拓けた創造都市」をまちのフューチャービジョン、いわゆる将来都市像として描く八戸。自分の未来を考えることは、まちの未来につながります。自然、食、文化、産業、人の温かさを受け継ぎながら、これからも新たな価値を生み出し続けるまちへ。次の50年、100年先に向けて、「ここに居たい」と感じられるまちを、ともにつくっていきましょう。

八戸市

用語集

新産業都市
八戸圏域連携中枢都市圏
基本構想
基本計画
将来都市像
庁議
市民参画
こどもモニター
パブリックコメント
市政施行100周年
グループヒアリング
市政モニター

■編集・発行

八戸市 総合政策部 政策推進課

〒031-8686 青森県八戸市内丸一丁目1番1号

TEL : 0178-43-2111 (代表)

H P : <http://www/city.Hachinohe.Aomori.jp>